

第一章 郷土と時代

日本を構成する四つの島のうち、最も小さいのが四国である。

この狭い島に、標高二千メートル近い二つの主峰を持つ四国山地が東西に盤踞し、その面積の大部分を蔽っている。この四国山地の北辺を本州を縦断してきた中央構造線が吉野川に沿って東西に横切るが、さらにこの北側に隆起しているのが讃岐山脈（あるいは阿讃山脈）である。東西百キロメートルにわたるこの山脈は、東は鳴門海峡から起ちあがりつつ、徳島、香川両県の県境をなして西に走り、愛媛県との県境で下降して、讃岐と伊予がかかえる燧灘に沈む。

この沈下の地点の北側が、香川県三豊郡豊浜町である。

われわれがいまからその生涯を追つことになる大平正芳は、この地に生を享けた。

豊浜町の主峰高尾山（四百九十六メートル）の山頂に立つて、北西に向かえば、この町の田園地帯を一望のもとに見渡すことができる。近くには、山の傾斜地につくられた溜池が、そこかしこに点在し、秋には黄金色に波打つ田畑や果樹園が、次第に下って瀬戸の海岸線にまで広がる。眼を遠くに馳せれば、波静かな燧灘に、伊吹島の孤影がかすむ。

この田園地帯は、昭和三十年（一九五五年）、旧豊浜町と合併されて現在の豊浜町となるまで、和田村と称されていた。そして、この村の長谷ながたにという部落にある大平の生家は、いまもひっそりと昔日の面影をとどめている。

この和田村が今日のようなゆたかな土地となるには、何百年にもわたる村人たちの涙くましい努力があった。まず何よりも水利上の悪条件を克服しなければならなかった。香川県の面積は、小さい四国の十分の一、都道府県の中で全国最小の大阪府よりわずかに大きいだけで、大山脈もなく、したがって河川に恵まれていない。雨量の少ない瀬戸内式気候であるため、地表水も地下水も少なく、しかも山地の傾斜が急で、保水の条件はきわめて悪い。

平安朝の昔、讃岐の国司は「晴五日を経れば水湿の潤いなく、霖雨二日に及べば洪水の難あり」と訴えたという。

このため、讃岐の人々は昔から、各所に溜池を築造し、冬のうちから余水をためて夏の灌漑にそなえた。全県でその数二万余に及ぶ。昭和四十九年に讃岐山脈をうがって吉野川の水をひく香川用水が完成する以前は、香川県は用水の七十八―セント以上を溜池に依存していた。

讃岐国多度郡弘田郷屏風浦に生まれた真言宗の開祖空海（七七四―八三五年）がいまなお弘法大師として多くの人々の尊崇を集めているのは、その宗教的事蹟のためばかりではなく、日本一の満濃池をはじめ、彼が修築した数多くの溜池が今日でもこの地方に大いに裨益しているためでもある。

和田村はとりわけ傾斜地が多く、農地を開発するには斜面を開墾しなければならなかったが、そのことは同時に、溜池も山の中腹につくらなければならぬことを意味した。しかし、こうした困難にもかかわらず、住民の開発意欲は高く、『豊浜町誌』によると、和田村の農地開発は、江戸時代から、いまの豊浜町を構成する四つの地区（姫浜地区、和田浜地区、和田地区、箕浦地区）の中でも最も盛んだった。寛政元年（一七八九年）の文献は、当時、総畝数百七十九町六反、うち古田屋敷・古畑が約百町歩で、新田・新畑として約七十九町が開拓されており、家数も一番多く三百九十五軒、うち本百姓三百十九軒、間人（身分の低い百姓）七十軒で、ほとんどが農業に従事していたと記している。これは、伊予、阿波その他からの移住民がこの地に住みついて開拓に励んだためとされている。

耕地の拡大と並んで農業技術の改良、農産物の多様化も進んだ。良質の讃岐米が作られるようになり、讃岐三白として有名な砂糖、棉花（残りの「一白」は食塩）の生産も大幅に増加し、さらに藍、甘蔗、菜種等の栽培も行われるようにな

った。またそれらの農産物を加工・販売する商工業も次第に発達した。温暖な気候と交通の便とに恵まれて、この地方では農業の商工業化が比較的早くから始まっていたのである。

明治に入ると、農耕技術の進歩と農具の改善がはかられる一方、耕地整理、水利の改良が進められた。明治十七、八年（一八八四、八五年）頃には養蚕業が取り入れられて桑畑ができた。柑橘、温州みかん、梨、ぶどう、柿等の果樹栽培も始められ、また甘藷、蔬菜等の栽培も盛んになった。

因みに、昭和四年（一九二九年）の統計では、和田地区の耕地面積は田約三百町歩、畑八十五町歩、合計三百八十五町歩と、寛政元年以来百四十年の間に二倍以上に増えていることがわかる。

大平正芳は、明治四十三年（一九一〇年）三月十二日、この和田村の大字和田甲一〇八二番地で、父利吉と母サクの間に生まれた。

その祖先については、大平正芳自身が次のように記している。

「大平家の古い家系は明らかでないが、戦国時代に土佐から移り住んで、このあたりを支配していた大平伊賀守国祐という豪族の末裔に当たるものようである。その居城があった城山（獅子ヶ端山）には、今でも城をめぐる石垣や泉の跡がある。

……城主伊賀守国祐は、四国征服途上の長曾（宗）我部に追われて、家臣の下に身を寄せたといわれているが、その後の消息はさだかでない。嫡子は城山の南側にある『乳母ヶ懐池』に乳母に抱かれて入水、息女は豊浜町の『姫浜』の沖に身を投げてあえなく果て、弟だけ災禍を免れてこの地に落ちついたという。国祐の菩提寺『国祐寺』は、今なお大平姓を名乗って法燈を守っている。」（『私の履歴書』）

『讃州府志』『西讃府志』などにもとづく『三豊郡史』『大平氏系図』等によれば、大平氏は藤原氏で藤原秀郷（田原藤太秀郷）の五男千常の子孫である（『鎌倉武鑑』）。千常の子文脩は近藤を氏とした。また千常の四代の裔脩行が近江大掾に

任じられたので、近藤（近江の藤原氏という意味）を氏としたとも言われている（『西讃府志』）。脩行の四代の孫国澄は国隆ともいって、多度郡仲村と三野郡財田を領有して山地右京之進の配下であった（『讃州府志』）。国澄の子国平は讃岐の守護となった（『西讃府志』）。また、その子国盛は大平を氏とし、頼朝から土佐で領地をもらった。その子国秀は財田端の城主で、財田上の村にある八幡宮の本殿棟木には国秀の自筆があったと伝えられている。財田の伊舎那院（北田山如意輪寺）には国秀の墓といわれる石塔がある。この塔は大平氏累代の墓であって、国秀・国時・国頼・国通・国房の五代とその他一族の遺骨が葬られている。国時は駿河の国大平郷を領していた。国頼は三野神田郷・麻・羽方を管理し、西大野荘の所務職にもなり、細川氏の家臣であった。国房は財田西の村を領有した初めの人である。国房の孫国有は上大野村を領している。国有的四代目の孫国清は、細川政元が河野四郎通春を討った時、細川氏に従って出陣したが、伊予の寒川村で病死した。

国清の六代目の孫が国祐である。国祐の父は伊賀守国雅で、母は大西備中守長清（川之江轟城主）の息女、妻は香川元景の息女である。『国祐寺縁起』では、国祐は土佐吾川郡の城主で、永禄五年（一五六二年）長宗我部元親と戦って敗れ、香川信景を頼って多度郡中村に来て暫く住んでいたが、のち和田村に来て獅子ヶ鼻（端）に城郭を築き、ここにあった真言宗の毘盧遮那寺を菩提寺としたことになっている。しかし、前述のように国房が財田西の村を領有したのが応永（一三九四年）以前であり、その孫国有が上大野村を領していること、大平伊賀守の山城が西村城で財田西の村の知行寺山にあったこと、同じく西の村には大平伊賀守を祀るという大平神社があるという事実等から、大平氏が讃岐の財田付近に住んでいたのは、鎌倉時代から戦国時代にかけての長い期間であったことは間違いないようである。

『三豊郡史』は、「当国殊に本郡に蔓延せる大平氏は藤原秀郷の裔なる近藤国平より出でしことは、『鎌倉武鑑』『大平氏系図』により明らかにして、土佐大平も国平を祖とせることは足利時代の諸家紋帳に土佐之藤之大平近藤国平末とあるにて証することを得るものなれば、讃岐及び土佐の大平は同系統のものにして」と述べている。

秀吉が四国を統一したのち、讃岐の領主は仙石秀久になり、香川氏は逃れて土佐へ行ったが、大平国祐は秀久に召され

てこれに任えた。

仙石氏は秀吉の九州島津攻めの先鋒として天正十三年（一五八五年）十月より豊後に転戦したが、国祐の長男の国常と郎党もこの戦いに加わった。翌天正十四年、国常は家臣と共に豊後戸次川で討死をとげた。時に十八歳。主従三名は、いまも国祐寺墓地に合祀されている（国常の死については、『私の履歴書』の記述と異なる）。国祐の二男、三男は共に出家した。国祐の弟としては、上麻村（現在の高瀬町大字上麻）の麻城主の近藤国久、財田端の城主の太平国秀、および近藤四方太夫等が伝えられている。現在でも国祐の末裔藩と言われる家が諸処にあり、国祐寺を訪れる人が絶えない。

天正十五年には、秀吉の家臣生駒雅楽頭親正が讃岐十七万六千石に封じられ、やがて生駒氏の没落、伊予三藩主による統治の一時期を経て、讃岐は高松藩（十二万石）と丸亀藩（五万三千石）の東西二藩に分かれての二藩時代となる。高松藩は常陸下館城主から転封された松平頼重が藩主となつて、明治維新まで十一代、二百二十八年間続いた。一方、丸亀藩は寛永十八年（一六四一年）に九州天草の富岡城主山崎家治が初代藩主となつて三代、十七年続いたのち、播州竜野の城主京極高和が転封され、三代目の時（元禄七年＝一六九四年）に京極高通が一萬石を分封されて多度津藩を立て、以後、讃岐は三藩時代となり幕末に至ることとなる。

この間、豊浜は伊予、土佐の両藩主が参勤交代に際して陸路を利用する場合必ず通過する街道上の重要な位置を占め、また江戸時代から賑やかに往来した金毘羅参詣の旅客の多くもここを通過していった。現在の豊浜港（和田浜港）の築港は明和八年（一七七一年）に着手されて、安永二年（一七七三年）に完成しており、以後、讃岐の海上交通の中心地として大いに賑わつたものである。

豊浜町が昭和四十六年八月に戸籍台帳で行つた「姓氏分布調査」の結果では、和田地区に大平姓が十六戸あつた。また善通寺に在住する大平武義の昭和五十五年四月の調査では、大平姓は西讃に広く分布しており、丸亀市二十七軒、坂出市十四軒、観音寺市三十九軒、善通寺市五十七軒、仲多度郡四十五軒、綾歌郡十三軒、三豊郡百五十八軒、計三百五十三軒といふことである。

正芳の祖父岩造は大平総本家の分家に生まれ、明治に入つて村会議員などをつとめていた。父利吉は岩造の二男だったので、これからさらに分家して新しく一戸を構え、一町二、三反の田を自小作する中農だった。彼は岩造と同じく村会議員や溜池の水利組合の総代等をつとめ、よく人の世話をした。

水利組合とは、溜池の水を利用する農家が村を横断的に形成する組合で、その総代の任務は、「用水池及び用水路の管理ならびに池のユル（開）抜き、配水、池の堤防の修理など水利に関する一切の権限をもち、水利費の取り立てなどの財務を司る」ことであつた（『豊浜町誌』）。したがつて、水利総代とは村の役職とは別の「顔役」であり、利吉は五十町ほどを灌漑する野々池という溜池を差配していた。

その利吉と母サクについて、大平はこう描写している。

「父は、明治三年生まれで、これという学歴はなかつた。しかし、一応書はよくするし、和漢の古典にも相当通じていた。和綴の本のところで、朱の紙片が貼付してあつた。これは、そのくだりに疑問がある印で、疑問が解けるとその紙片をそつととり、本自体は、全然汚さないように配慮されていた。

……父は酒が好きで、晩酌を欠かさなかつた。また割合交際が広く、人に招かれることも多かつた。村の店から盆暮の決済で日用品を掛買する通帳には、三銭とか、五銭の豆腐やあげの買入れの記載にまじつて、一円二、三十銭の清酒が、大体、一週間ぐらいの間隔をおいて記入されていたことを覚えてゐる。

母は隣の慶尚北道迎日郡の大松面というところで雑貨商を営み、伯父はその面長（村長）をしていた。ただ祖母だけは移住し、慶尚北道迎日郡の大松面というところで雑貨商を営み、伯父はその面長（村長）をしていた。ただ祖母だけはどつしたことが独りで留守宅を守っていた。」（『私の履歴書』）

正芳の姉ムマの思い出では、「父は几帳面な人だったが、私たちは父から怒られたり、怒鳴られたりすることがなかつた。子供たちが勉強していると、ランプを磨いてそばに寄せてくれるし、帽子を忘れたら自転車を追つてきてくれたり、そりややさしかった。

人望があつて、なんかもめ事があると、飛び出して行って、〃わしが行くとまとまるんじや〃と言つておつた。父はその頃には珍しく、よく母と連れだつて出かけたりした。

むしろお母さんがきびしかった。男まさりで、本家の兄ちゃんもかなわんと言つておつた。それでも他人には親切で、子供が遊んでいると、お餅の切つたのを揚げて、お砂糖で丸めて、誰それおいでと言つて、食べさせておつた。」

正芳がこの世に生を享けるまでに、父母の間にはすでに五人の子供が生まれていた。キク、信雄、テツ、ムマ、数光の男二人、女三人である。キクは満一歳、信雄は二歳半で夭折していたので、正芳が生まれたときには、テツ、ムマ、数光の兄妹が同じ屋根の下にいたことになる。正芳のあと、二年半後に芳数、さらに四年後に富江が生まれた。

ところで、その頃の大平家の生活内容はどのようなものであつたか。

大平自身によると、「米麦を主とする当時の農家の家計は、けつして楽ではなかつた。私のうちは、子供が六人（男三人女三人）もいたのでなおさらであつた。私はもの心がついてから、漬で袖がピカピカ光っている着物を着て、稲藁で作つたぞうりをはき、一汁一菜に麦飯（もちろん米が三、四分は入つていた）を食べて育つた。海浜近くに住みながら、鮮魚にありつくのは祝祭の日くらいで、たまに食膳に見かけるものは、鱈や鯖の干物であつた。」（『私の履歴書』）

正芳の弟芳数は次のように回想している。「家は八人家族だつたから二升炊きぐらいの大釜で、良くても麦七割、米が三割、いまのようにお櫃になんか移さずにそのまま大茶碗によそつたものだつた。むかしは丸麦だつたから、一度、麦だけを炊いて、それに米をまぜて炊かないと食べられなかつた。のちには平麦となつて一緒に炊けるようになったが、おかずは年中、味噌と自家製のたくわん。味噌をもとにして汁を作り、米の粉の団子を浮かせたものを「ひっかき団子」と言つたが、それが何よりのご馳走だつた。」

しかし同時に、芳数は次のようにも語っている。「どういふわけか、父と母は米の飯を食べていた。それから仏さまにも

米の飯をあげたので、あとでおろして食べるのは、兄二人と私で取り合いだった。」

もつとも当時においては、麦飯はとくに貧乏のシンボルだったわけではない。『和田村の実相』という文献には、「明治大正初期は、米一〇三に、麦九〇七を混ぜた麦飯が中心で、年代が下がるにしたがって米の割合が多くなり、大正昭和初期には米四〇八、麦六〇二、そして昭和初期になっても、この混合された麦飯を主食とする家がなお七五%はあった。」とある。

以上の記述から、その頃の大平家は、旦那と言われる大地主は別として、村では中流の生活をしていたのではないかと考えられる。だが、むろん、それは今日の農村の生活水準から見ればはるかに低いものであった。しかも、その低い水準を支えるために、どの農家も老人から子供まで一家を挙げて働かなければならなかったのである。

大平正芳が呱呱の声をあげたこの頃、時代は日露戦争の勝利のあと、明治の終焉を前にして、一つの大きな曲り角にさしかかっていた。それは、外には日本が満州経営、朝鮮併合と西欧列強に倣って植民地経営に乗り出すとともに、久しきにわたる日本の悲願とも言うべき不平等条約の改正に成功し、関税自主権の回復もあいついで実現した時代であった。他方、内には工業化の急速な進展とともに労働問題が激化し、社会主義運動とそれをめぐる国内の対立が激しさを加えた時代でもあった。

明治四十三年（正芳の生年）を特定するならば、この年、中央倶楽部ならびに立憲国民党があいついで結成された（三月）。文壇では武着小路実篤、志賀直哉、有島武郎らにより同人誌『白樺』が創刊された（四月）。ハレー彗星が地球に接近した（五月）。幸徳秋水らの大逆事件が起こった（五月）。不平等通商条約の一年後の廃棄が当事国に通告され（七月）、満州の現状維持に関する日露新協約が調印され（七月）、朝鮮が併合された（八月）。白瀬南極探検隊が出発し（十一月）、日本人が飛行機で初めて空を飛ぶという冒険も試みられている（十二月）。

この頃の国民の気風を窺わせるもの一つに、同年一月に月刊総合雑誌『太陽』（博文館発行）が 志等 国 と題する臨

時増刊号を出していることがある。そこには、急速な工業化、近代化、西欧化によって、日本は大口ロシアに打ち勝ち、曲りなりにも先進国の一つとなったという自負がみなぎっていた。

一方、この年から三年前の明治四十年（一九〇七年）に、当時の内務省地方局有志によって、わが国最初の 田園都市に関する報告書がまとめられていることも記憶しておいてよいであろう。

ただ、もとより、当時の香川県、しかも都市から隔離された農村の生活や精神の状況は、中央に比べればまだまだ遅れたものであった。そこには、古い、土地にしがみついて生きねばならぬ人々が、江戸時代とさして変わらぬ生産様式の中でひっそりと暮らしていたのである。

そのような時代、そのような環境の中に生まれた大平正芳の最も古い記憶は次のようなものである。

「私の額には、ちょうど真中どころに、長さ一吋弱の相当深い傷跡が、左右に走っている。子供のときには、それか余程深かったとみえて、随分気を揉んだ記憶がある。写真を撮っても、その傷跡が鮮明にと謂わぬまでもいつも痕跡を止めていたものであるが、成長するにつれて余り目立たなくなってきた。

それは私が三、四歳の頃のことであるが、……この傷を受けた場面だけは不思議によく覚えている。当時私の家におしげという女中がいた。他に男の雇人が一人いて、これが相当大食漢であって、随分長く勤めてくれたが、その人についてはこれといって大した思い出はない。その女中が私を背負って門の前の田の端で遊んでいた。ところが何のはずみか、私を背負った儘向き直った瞬間に、私の額を田を囲む石畳の角にぶっつけてしまった。私の額からは鮮血が淋漓とほとばしり出たものである。ちょうど野良仕事から帰りがけの母が、狂いそうな顔付で、私を抱えて家の中に運びこみ、お灸の草か何かで応急の手当をしてくれた。

おしげさんは、その後二、三年は私の家で働いてくれたが、やがて村はずれの小さい旗亭の酌婦になった。それでも度私を連れに来てくれたので、私はしょっちゅうその旗亭に招かれざる客となっていた。それから暫くして、おしげさんは病んで死んでしまった。

これが私が生まれ落ちてからの最初の淡い思い出である。その旗亭は、昔ながらの藪に囲まれて、昔のままの姿で残っている。この淡い思い出が、私にとっては、年月を経るに従って、益々濃くなっていくような気がする。その旗亭は、村はずれの三叉路の脇にあるが、そこを通る度に、私はおしげさんに呼び止められそうなのである。」

この文章は、「額の傷」と題して、大平正芳が昭和二十八年に処女出版した『財政つれづれ草』の冒頭に掲げられている。幼年時の彼の心象風景を窺うことができる。